

## 【 巻 頭 言 】

### 君たちの進む路

校長 杉林 正敏

今年の春、うれしいニュースがありました。それは、3月に卒業した72期生の国公立大学現役合格者数が72名に上ったということです。この数字は、統計の残っている1976年（昭和51年）以降の最高数値だと進路の山田先生から聞き、一層うれしさがこみ上げてきました。

今、この『進路の手引き』を手にしている西高生の皆さんも、西高3年間を終えた後、大学等で何を学ぼうかなどと真剣に考えていることと思います。まだはっきりしていない人は、まず自問してみましょう。自分を客観的に知ろうとする、距離を置いて自分を見ようとすることで自己理解は深まるものです。例えば、「自分の好きなことはどのようなことなのか?」「自分が心からやりたいことは何か?」「自分が本当に大切にしていることはどのようなことなのか?」などをとことん考えてみてください。このようなことを考える中で浮かび上がってくるのが自分の価値基準であり、そこから自分の夢が紡ぎ出され、目標も見えてくるはずですよ。

目標が定まったら、方法論としては簡単です。毎日必ず家で机に向かって勉強するだけです。そんなに簡単にはいかないという反論が聞こえてきそうですが、自分の人生は自分で創るものです。目標があるならば、それに向かって歩みを進めないのは何より自分を裏切ることになります。それに、視点を変えれば、高校時代に努力を重ねることは、人生において大いに価値のあることだとも言えます。

こうして、努力が実を結び、第一志望の進路を実現できれば言うことはありません。心からお祝いします。しかし、ちょっと待ってください。問題はここで終わらないということです。肝心なのは、西高卒業時に第一志望の進路を実現しえたとしても、その「結果」は、実は人生における「過程」に過ぎないということです。ただの「出発点」かもしれません。このことを今から心に留めておいてほしいと思います。人生100年時代を生きる「君たちの進む路」は果てしなく続いているのです。

話を大きく広げます。イスラエルの歴史学者、ユヴァル・ノア・ハラリ氏が昨年インタビューで次のように語っています。今後10～20年の間に人類が直面する課題は、①核戦争を含む大規模な戦争、②地球温暖化、③AIなどの「破壊的」な技術革新であり、特に技術革新については「30年後の雇用市場がどうなっているか、どんなスキルが必要なのかもわからない」ということでした。こうした文脈の中でハラリ氏は「AIは進化を続ける。人々は一度だけではなく、何度も自己改革を迫られる。このストレスは耐えがたいだろう」とも言っています。つまり、ハラリ氏はAI時代の世界を生きる人類は何度も「自己改革」を余儀なくされると述べているわけです。

話を「君たちの進む路」に戻します。要は、大学に入って学び卒業しても、さらに大学院を修了して学位を取得しても、皆さんが学んで「進む路」に終わりはないということです。

西高では「国際社会に貢献できる人材を育成」することを「目指す学校像」として掲げています。この点を考えると、その卒業生となる皆さんが「進む路」は、日本の、ひいては世界の課題に沿って「進む路」と軌を一にすることが期待されます。

元伊藤忠商事会長で、中華人民共和国特命全権大使も務めた丹羽宇一郎氏は、著書『日本をどのような国にするか』の中で「日本がどうしてもやらなければならないことは、平和と自由貿易です」と述べています。そして、「世界の平和を日本は率先して守らなければいけない、それが日本の宿命であり、最大の国是ということになります」とも言っています。一つの意見ではありますが、氏がここで日本の「進む路」が世界の「進む路」に貢献する必要性を訴えていることは傾聴に値すると思います。

私は西高生が将来、日本の進路、世界の進路に深く関わることを願ってやみません。そのために皆さんが高校生の今から自らの「進む路」をしっかりと吟味することを期待しています。